郷土への扉 The gateway to local history

牧園と馬

牧園町は明治22（1889）年に牧園村が誕生するまで「踊（おどり）」という地名でした。「牧園」は現在もある宿窪田の一部の地名で、そこに牧園小学校ができたため村名を牧園村に改めたそうです。「牧園」の由来は、時期は不明ですが、放牧地があったという伝説に基づいているようです。

軍馬生産の拠点に

牧園は良馬を産したことでも有名です。江戸時代中期まであった湧水（旧吉松）町の牧が廃される時、番人に払い下げられ踊郷（おどりごう）に移されました。霧島山麓で育てられた馬は、後に「踊馬」と呼ばれ大変有名になったそうです。

明治20年代に日清戦争が起こり朝鮮半島を巡るロシアとの緊張が高まると、政府は軍備増強のため野戦に必要な軍馬を生産することが課題となりました。明治29年3月には「種馬牧場（ぼくじょう）及び種馬所官制」を公布。全国で種場牧場や種場所設置の適地調査を行いました。政府は全国に種馬牧場を2カ所、種馬所を16カ所設立する予定でした。

種馬牧場は種馬所に供給する種牡馬（しゅぼば）の生産が目的でした。明治29年5月、当時の姶良郡牧園村大字下中津川（現在の牧園町高千穂）に九州種馬牧場の設置が決まりました。この背景には当時の加納久宜（かのうひさよし）鹿児島県知事や、鹿児島県中央種馬組合関係者の努力がありました。ちなみにもう1カ所は青森県の奥羽（おうう）種馬牧場でした。

苦難の牧場整備

当時は鉄道もトラックもなかったため、牧場建設のための資材運搬は困難を極めました。資材はまず、隼人の浜之市港まで海上輸送されました。国分から重久、関の坂を経由し田口までは、明治28年に開通した県道を利用することができたため荷馬車で運ばれました。しかし急な坂道が続く田口から牧園までは牛車（うしぐるま）を引き運搬しました。

牧場の周囲には高さ1・8メートル、底辺が1・8メートル、上辺が0・9メートルの土塁が構築され、場内にも構築されました。その後、牧草を耕作するための畑が整備されました。このため、畑を耕し整地する機械や牧草を刈り取る機械など、大量の農具が北海道から導入されました。当時の従業員は種馬や牡馬を取り扱う人が約40人、耕作者が約10人でしたが、耕作には大きな農具を使用するため、繁忙期には臨時に人を雇って対応していたようです。

霧島高原乗馬クラブ内にある牧場跡地の碑

牧場の発展と廃場

牧場の設置に伴い、周辺の人口は急増しました。日用雑貨を販売する商店や米・麦などの消費も増えました。農家と兼ねて牧場で働く人や、牧場の拡大工事などに携わる人も多くなり、周辺の人々の生活も向上しました。そのため、明治31年5月には中津川尋常小学校の分教場が設置されました。その後も鉄道の開業や牧場周辺の道路整備などにより、さらに人口が増えていきました。

しかし明治40年頃には軍の戦略変更により軍馬の需要がなくなり、九州種馬牧場は廃場となりました。建物と用地の一部は引き継がれ、鹿児島種馬所となりました。現在は霧島高原乗馬クラブにその名残があります。

（文責＝坂）